障がいのある子の就学講演会 2014(2)

25 日のつづきである。そこでも紹介した西尾市の能美春紀くんの学校生活について、もうすこしレポートしてみたい。

写真下は集いの能美さんの報告資料の表紙である。重複障害をもつ春紀くんが、公園の地べたに座って前を見ている。写真下は資料にあった中日新聞 2000 年 3 月 30 日の西三河版による。西尾市教育委員会から寺津小学校への転入を認められ、市役所で記者会見をした時である。右から順に春紀くん、兄健生くん、母康子さん。康子さんは「地域の子や兄と一緒に通学できるようになり、やっと地元で日常生活を送れる」と喜んだ。兄の健生くんも「春紀と一緒に通えるようになってうれしい」と話した。

特別支援学校から地元の小学校普通学級への転校であり、長い間の「苦労」と多くの支援や協力、理解があった。報告では「春紀の学校生活」として、日常の生活・授業、運動会、プール、学芸会、マラソン大会、校外学習、田植え、林間学習、修学旅行、という 9 つのテーマで話された。あとで詳しく書かれた資料を読むと、報告が思い起こされた。すこしだけ紹介しよう。

2 年生の初めての学芸会である。春紀くんは[博士 4]の役であり、級友の力を借り演じた。「車椅子に乗っているから、ホーキング博士といったところでしょうか。ホーキング博士は言っています。『障害をもつ子どもたちを、同じ年齢のほかの子どもたちと一緒に育てるようにすることは、非常に大切です。そのことは、彼らの自己に対するイメージの形成を助けます。もし、人が幼い時から引き離されているならば、どうやって、人類の一員であると、感じることができるでしょうか?』と。」

「親の付き添いなく学校へ通う、林間学習へ行くということは、他の子同様、春紀にとっても自立への道を歩んでいるということです。---- 大人が隣りに居過ぎると、子供同士のコミュニケーションの機会を奪うこともあるということを、どうか一度考えていただけたらと思います。私が伝えたいことは、決してコミュニケーションを子どもたちに『させる』のではなく、コミュニケーションの隙間を作っていただきたいということです。」じつは今回の講演会のタイトルをどうも理解できなかった。能美さんの報告を聞き、春紀くんの学校生活を級友や先生のことばを交えて詳しく紹介した資料を読んで、「親の付添い」ない学校生活の意味がよく理解できた。京ちゃんの学校生活についても、同じことがいえるのではと考えた。　(2014 年 11 月 27 日)